

水戸あれこれ

スペイン風邪を乗り越えた 水戸の先人たち



日本銀行水戸事務所
所長 鈴木 直行

この春から当地に赴任し、コロナ禍を経験する中で、スペイン風邪と呼ばれる感染症が流行した、今から百年ほど前の1920年前後における水戸の歴史をひもとく機会がありました。

「水戸市近現代年表」をみると、当時の感染症による厳しい影響が記録されています。同時に、この困難な時期に、今日の水戸の魅力や強みにつながる前向きな取り組みが記録されていることも印象に残りました。

1つ目は、教育環境の整備です。現在の茨城大学につながる旧制水戸高等学校は、1920年に開設され、閉校までの30年間に5千数百名の卒業生を送り出しました。「水戸高等学校史」によると、卒業生は、政界、官界、実業界、教育、文化、芸能等の各分野で、日本の再建の中核となったといえます。今日、感染防止の新たな技術やサービスの提供などに、地元大学発の企業が積極的に取り組んでいます。私の職場でも、水戸の学校を卒業した優秀な同僚が数多く活躍しています。弘道館

設立以来の教育を大切にする伝統は、水戸の大きな強みと感じます。

2つ目の取り組みは、自然と共生する街づくりです。今は市民の憩いの場となっている千波湖の改良事業は、丁度百年前に県会で可決されました。当時荒廃していた千波湖は、一部が水田化されるとともに、大規模な環境整備が行われたと記録されています。

千波湖は都市公園としてニューヨークのセントラルパークに次ぐ規模と、学びました。水辺に遊歩道があり、間近で湖と美しい自然を満喫できる公園としての景観は、かつて滞在したパリのブローニュの森の印象と重なる部分も多いと感じます。世界級の規模と美しさを備えた千波湖をはじめとする豊かな自然は、この街の大きな魅力です。

3つ目は、交通網の拡充です。1920年前後の水戸では、道路や鉄道の整備も進められました。常磐線の一部複線化や、那珂川に架かる万代橋開通もこの頃です。

新型コロナウイルスとの共生が求め

られ、週の何日かは在宅でテレワークという働き方が広がると、首都圏からの交通網が整備され、充実した教育環境と豊かな自然がある水戸は、過密な都会を離れた暮らしを求める人々にとって、新たな生活拠点を選ぶ際の有力な候補地となり得るのではないのでしょうか。

昔話が長くなりましたが、もちろん今日の水戸でも、コロナ禍を乗り越えるため官民によるさまざまな取り組みが進んでいます。例えば、当会議所の「テイクアウト

「ミト」や「わらつと納豆」の企画を通じ、新たな味覚と出会うとともに、お店の方々とのちよつとした会話で自分も元気づけられました。厳しい環境でも前向きの取り組み

みを忘れない伝統は、確り受け継がれていると感じます。

日銀水戸事務所は、本年8月、開設75年目を迎えることができました。皆さまの支援に、改めて厚く御礼を申し上げます。今後も、①お札の発行と流通、②金融経済に関する調査と情報発信、③金融教育の推進を通じて、微力ながら地域の皆さまのお力になれるよう取り組んで参ります。引き続きご指導の程、宜しくお願いを申し上げます。



▲水高スクエアに建つ学校跡の石碑